



『精神病といふこころ どのようにして起こりいかに対応するか』

■松木邦裕/著

■新曜社 一四〇〇円(税別)

◇ 精神病者と聞けば、心の通じない相手としてかかわりを避けることに終始した時代があつた。今もなおその時代に生きている人達も少なくない。病者の「妄想」や「幻覚」は、他者による了解が不可能で、意思疎通性を欠く病態であるという概念で片づけてきたと、顧みて思う。

また、多くの教師、生徒指導や教育相談を主として担当する立場の教師、さらには、精神保健の専門性も期待されている養護教諭や「心の健康」の専門家たるスクールカウンセラーに至るまで、学校教育内のそれらの立場における

精神病への対応の不手際も、少なからず見聞きする。

本人や保護者の拒絶反応を招き精神科臨床への橋渡しがうまくできないことを、本人等の病識の欠如のせいにすることでの、結果、学校からもはじき出されてしまうような例を見過ごしてはならないのではないか。

◇ カウンセリングを学び、学校でそれに応じた役割を担う者が、精神医学の初步的な知識ぐらい持つ必要は言うまでもないが、そのことは、精神疾患の病理を客観的知識として学習すれば

済むことではない。本書は、そのことを、精神科臨床の門外漢であるわれわれに、熱心に問いかけている。

精神病状態にある人ととの「出会いのなかで直面する『わからないもの』はあまりにも強烈で、(略)そこで私たちがどうするか」といふと、まず、当の不気味な怖さや心もとなさ、そしてそれを体験することへの憎悪といった感情、それらを(略)すっかり抑え込むとします。また、(略)あたかもそれがわかつてゐるものであるかのように扱おうとします。あるいは、(略)無視したり忌避したりするのです。

(「はじめに」)

「精神病状態」に向かい合つたときのこうした心の動きに気づき、「理解できないものへの耐えられない感情」を乗り越えたところでの、病者への深い理解を求めるものである。

BOOK 本 GUIDE

◇ 精神病状態と向き合うことの大変さは、本書で一貫して説かれる。精神分析の立場からの専門用語を咀嚼し、時に後戻りしながら読み進むことで、人間である相手に向き合うむずかしさと重さが、如実に伝わってくるのを感じるだろう。

そして、読後一呼吸おくと、生徒指導上、生徒と対決するような局面に遭遇して怖さを感じるのは相手がわからぬからだと気づいた昔の経験がふと浮かんだり、共感的理解ということの奥深さや厳しさにあらためて考え及んだりもするかもしれない。本書が、單

なる解説書でない所以だろう。

◇ 精神分析学による精神病治療の一線でのアプローチを踏まえて「精神病の人たちへの理解を深め」ようとするのが本書のねらいである。

はじめに、「ある程度持続的に、みずから空想を現実と混同しており、それをそうと認識せず空想優位のままに考えふるまる状態」と「精神病状態」を定義づけ、その精神病状態の分類を示す。

そしてそれらの病態や経過について「もつともよく出会う」精神病分裂病を中心には描き出す。

以下、本書の構成は、第一章「精神病」という状態」、第二章「移り変わりゆく不安」（以上「精神病とはなにか」）、第三章「自分がなくなる恐怖」――
極期▽精神病状態への対応、第四章「なまなましい怯えとの格闘」――
急性期▽精神病状態への対応、第五章「壊れていくところ、そして悲しみ」――
慢性期▽精神病状態への対応
(以上「精神病臨床の実際」)、補章



(宏)

◇ 精神病状態への心理療法的アプローチ」というのだが、その主眼は言うまでもなく「精神病のこころの理解」であり、精神分析的な対応の仕方のすべてを論じ尽くすことではない。